

日本最初の医学士神内由己について

酒井 シヅ, 神内 國榮

順天堂大学医学部医史学研究室

神内由己(1854-1886)は、1879(明治12)年に東京大学医学部を卒業した最初の医学士18名のうちの1人である。神内由己は1854(安政元)年に讃岐国木田郡井戸村高木の医師神内捨藏の次男(戸籍上長男)に生まれ、高松藩医柏原謙好に入門して医学を学び、1868(明治元)年15歳のとき高松藩講道館医学寮に入学、ついで1871(明治4)年に上京して、東校(東大医学部前身)に入学した。

この頃の東校は、東京府大病院を受け継いで、1869(明治2)年に大学東校が発足し、翌3年東校の学則が制定され、正則生と変則生の制度がはじまった。1871(明治4)年、ドイツ人御雇い教師ミュルレル、ホフマンが来日したとき、正則生が300人を超え、大広間で、小火鉢を抱えて、タバコを吸いながら、各自がヒルトルなどの解剖書を音読していて、まるでユダヤ教の教会に入ったようだった。それに驚き、さっそく東校を閉鎖して、医学教育の大改革を行った。修業年限を予科3年本科5年(後に予科2年に改める)として、任意であった学生定員と受験生の年齢を定めた。定員は本科生40名と予科生約60名とし、入学年齢は14歳から19歳までとし、入学は毎年9月に1回行くと定めた。神内由己は1871(明治4)年9月に18歳7ヶ月で東校の予科に入学し、2年後、1873(明治6)年に本科に進んだ。

神内由己は学費をどのように賄ったのだろうか。由己が実家宛に学費や食料を頼んだ手紙が現存するが、その他に、明治9年4月に神内由己が東京医学校宛てに出した学費給付願書が東京大学に現存する。それに以下の事が記されている。

「願書

私儀当時医学本科第六級にて修業罷有候処 貧困ニシテ自費修業難出来候 就テハ当明治九年四月ヨリ学資御給付相成度此段相願候也

明治九年四月

香川県平民讃岐国三木郡井戸村神内捨藏長男 神内由己 二十二年二ヶ月 証人 橋機郎 東京医学校御中」

ところで、文部省は1874(明治7)年に東校の学制改革を行い、東京医学校と改めた。東校では貸費生制度を行っていたが、貸費生規則を廃止した。それに代わるものとして、1876(明治9)年に給費生規則を定めた。給費生に給付される額は月額6円以下とし、卒業して成業についた後は、給付期間に応じて1ヶ月6円以下授業料を返納することと定めた。

神内由己が卒業した明治12年の卒業生18名の中で給費生にならなかったのは、佐々木政吉(杏雲堂)と高階経本(宮内省侍医)の2人だけであった。なお、佐々木政吉は卒業成績が2番で、この年にはじまった医学士の文部省留学生に選ばれる立場にあったが、官費留学生を断り、自費留学をしている。神内由己は留学生の候補にあがったが、石黒忠憲の『懐旧90年』によると、神内に与えられたドイツでの専攻科目が眼科であったことから辞退したとある。この年の文部省留学生は清水郁太郎、梅錦之丞、新藤二郎の3人であった。

神内由己は1877(明治10)年、卒業前であったが、大阪臨時陸軍病院に勤めている。1879(明治12)年11月の東京大学医学部の卒業式が行われ、卒業生にはじめて医学士の称号が与えられた。神内由己は25歳11ヶ月で卒業して、最初の医学士となった。

神内由己は1880(明治13)年1月から府立大阪病院(大阪大学医学部の前身)の教授掛となり、1883(明治16)年に大阪府立医学校校長になったが、結核に冒され、同年末に退官して、熱海に移った。翌年、一時的に回復して、熱海に開設された吸気館の責任者となり、開設準備から行った。しかし、1885(明治18)年、病が重くなって郷里に戻り、翌1886(明治19)年11月に亡くなった。享年33であった。